

重松清

1963年岡山県生まれ。早稲田大学教育学部卒業。91年『ピフォア・ラン』でデビュー。99年『ナイフ』で坪田譲治文学賞、『エイジ』で山本周五郎賞、2001年『ビタミンF』で直木三十五賞、10年『十字架』で吉川英治文学賞を受賞。著書に『流星ワゴン』『疾走』『その日のまえに』『カシオペアの丘で』『とんび』『ステップ』『きみ去りしのち』『峠うどん物語』など多数。

JASRAC 出 1211106-201

空より高く

2012年9月25日 初版発行

著者 重松清

発行者 小林敬和

発行所 中央公論新社

〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売 03-3563-1431 編集 03-3563-3692

URL <http://www.chuko.co.jp/>

DTP ハンズ・ミケ

印刷 三晃印刷

製本 小泉製本

©2012 Kiyoshi SHIGEMATSU

Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.

Printed in Japan ISBN978-4-12-004423-6 C0093

定価はカバーに表示してあります。落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

●本書の無断複製(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

43字×103行=4429字

「僕」の家に母親の友達の宮本が娘に関して電話をかけてきた。

※トンタマ=東玉川高校。

「あのね、お母さんの友だちで、宮本さんみやもとっているんだけど、知ってる？」

「うん……一回、ウチに来たことあるじゃん」

「そうよねえ、そんなことあったよね、とうなずくしぐさにも元気がない。」

「なにかあったの？」

「宮本さんの娘さん、香奈ちゃんかなっていつて、まだ小学三年生だったかな、四年生だったかな、あれ、どっちだったっけ」

「……で、なに？」

「交通事故に遭っちゃったの」

「ゆうべ自転車で塾から帰る途中、原付バイクと出会い頭にぶつかりそうになった。あわててハンドルを切ったはずみで転んでしまい、膝ひざを骨折した。」

「救急車も来たりして大変だったみたい」

「ゆうべのサイレンを思いだした。おふくろは僕の向かい側に座って、誰が聞いているわけでもないのに、「それでね」と声をひそめてつぶけた。」

「原付バイク、トンタマの生徒が運転してたんだって」

「マジ？」

「救急車もその生徒が一一九番して呼んだんだけど……トンタマってバイク禁止よね？」

「うん、見つかったら一発停学」

「三年生しかいないんだし、受験前にバイク乗り回してる暇なんてないでしょ。だから、違うんじゃないのって言ったんだけど、でも、ほんとにトンタマの生徒で、宮本さんは生徒手帳も見せ

てもらった、って」

「誰だったの？」

「篠沢さんも宮本さんから聞いただけだし、とにかくびっくりしちゃって、名前聞いたけどすぐに忘れちゃったみたいなんだけど……あんだ、誰か心当たりない？」

僕は黙り込んだ。ドカの顔が——こういうときにかぎって、にこやかに笑う顔が、浮かんだ。

始業のチャイムが鳴っても、ドカは教室に姿を見せなかった。

入学以来の無遅刻無欠席記録が途切れてしまった。

「あいつ、食い過ぎで腹こわしたんじゃないかねえのか？」と笑うヒコザは、まだ交通事故のことは知らないようだ。教えてやったほうがいいのかどうか、よくわからない。それにより、ドカが事故を起こしたと決まったわけではない。

朝のホームルームでも、クラス担任の矢野先生はなにも言わなかった。でも逆に、黙ったままというのが不自然な気がしないでもない。

休み時間のたびに教室を回って欠席者を確かめた。ついでに、さりげなく、「原チャリに乗ってる奴とかっていなかったっけ」「なんか変な噂とか、今朝聞いてない？」と確認した。昼休みまでに結果がわかった。三年一組から六組まで、学校を休んでいるのはドカだけだった。原付バイクをこっそり乗り回しているのもドカ一人。

五時間目の予鈴が鳴って教室に戻る途中、思いきってドカのケータイに「元気？」とメールを入れてみたが、放課後になっても返事は来なかった。

こうなったら、あとはもう正面突破で事実を確かめるしかない。職員室には、その無謀な体当たりを受け止めてくれるはずのひとがいる。

足早に廊下を歩きながら、ゆるんでいたネクタイを締め直した。呼び出しや日直や掃除当番以外で、要するに自分から職員室を訪ねるのは、トンタマに入ってから初めてかもしれない。

職員室のドアを開けて見回すと、ジン先生がいた。教頭先生の真ん前の席だった。他の先生たちの世間話に加わずに、一人で現代文の指導書を読んでいた。

背中を丸め、地肌の透ける後頭部を陽射しにテカらせた姿は、生徒相手に青春だの人生だのをアツく語っているときより、ひとまり小さく見える。居心地悪そうで、つまらなそうで、ちょっとさびしそうでもある。それを見て、なんとなくうれしかった。理由はよくわからない。でも、もしも職員室のドアを開けた瞬間、他の先生たちとおしゃべりしているジン先生を見たら、そのまま引き上げてしまったかもな、と思う。

席に近づくと、声をかける前にジン先生は本から顔を上げた。おう、と少しだけ頬をゆるめ、生徒にはなく友だちと話すようにつづけた。

「ドカくんがいないと、教室、静かだろ」

「あの……そのことなんですけど……」

先生は「うん？」と僕を見た。最初は怪訝^{けげん}そうな顔だったが、僕が目をそらさずにいると、「まいつちやったよな」と苦笑した。

その一言で、わかった。唇を噛んでうつむいた僕に、先生は隣の席の椅子を勧めかけて、「いや、それより外に出るか」と言った。僕もそのほうがよかった。

「ヒコザとかムクちゃんにも教えてやっていいですか」

「じゃあ、中庭で話すか」

「……はい」

「なんだ、しよぼくれた顔して。だいじょうぶだ、だいじょうぶ」

ジン先生は席を立つと、僕の肩をポンと叩^{たた}いて歩きだした。ガニ股^{また}気味にゆさゆさと歩く先生の背中が、さっきより微妙に大きく、分厚くなった。

ドカの事故は、ゆうべのうちに警察や病院に駆けつけた矢野先生から、朝の職員会議で報告されたらしい。

処分は三日間の自宅謹慎。就職が内定しているということで、停学からワンランク軽くなった。香奈ちゃんの膝の骨折も、年内いっぱい入院が必要でも、手術をしたり後遺症が残ったりするようなものではなく、その面では、最悪の事態は免れたわけだ。

事故そのものも、どちらかといえば香奈ちゃんの独り相撲だった。塾の帰りに、車道を自転車で走っていて、途中で向こうに渡ろうとして自転車漕^こぎながら後ろを振り向いたら、ドカの原付バイクがちょうど角を曲がってきた。距離は十分あったが、急にヘッドライトのまぶしい光が目飛び込んできて、あわてて手をかざして目をかばったら、片手ハンドルの体のバランスがとれなくなっ転んだのだ。

「じゃあ、べつにドカが百パーセント悪いってわけじゃないのか」

僕とヒコザはほっとした顔を見合わせたが、ムクちゃんの表情は暗く沈んでいた。

「ムクちゃん、どうしたの？」

「その女の子、クリスマスも入院してるんですね……」

ジン先生も「そこなんだよ」とため息交じりに言った。「ドカくんもそのことで落ち込んだりしてるんだ」

ドカの両親はすぐに香奈ちゃんの両親に謝罪して、治療費や慰謝料のことも親同士が話し合っ
て、うまくまとまりそうだという。

ただ、問題が一つ――。

「その子、ピアノを習ってて、クリスマスに発表会があるんだ。それをすごく楽しみにしてたんだけど、退院も難しそうだし、入院中は練習もできないから、あきらめるしかないってことになったんだ」

「でも、それはしょうがないっていうか、また今度のチャンスってことで……」

ヒコザが言いかけるのをさえぎって、「ないんだ」と先生は言った。「冬休みに引越して、三学期から転校するんだ、その子」

だから、「今度」や「次」はない。十二月の発表会が玉川ニュータウン最後の思い出になるはずだった。それが、事故のせいで台無しになってしまったのだ。

香奈ちゃんは、もちろんひどく悲しんでいる。それを知ったドカも、責任を感じて、でもどうすることもできずに、朝から部屋に閉じこもったままなのだという。

僕とヒコザはまた顔を見合わせた。ヒコザの頬はもうゆるんではない。僕の表情も同じだろう。ダッシュでドカの家に向かいたかった。ドカに会いたい。ドカの顔を見て、一緒にいてやり

たい。僕たちは、どちらからともなくうなずいた。二人とも気持ちは同じだった。

でも、先生はそんな僕たちに釘を刺すように言った。

「まあ、あとはドカくんの両親や矢野先生に任せるしかないよな」

「いや、でも……」

そう言われてあっさり引き下がるわけにはいかない。特にヒコザは、中退騒動のときの借りを返したいのだろう、口をとがらせて反論した。

「友だちにしかできないこともあるんじゃないですか？」

そうそうそう、と僕も隣でうなずいた。慰めや励ましを言うつもりはない。現実的にないが、できるかもわからない。それでも、とにかく会いたい。ドカも僕たちに会いたがってるんじゃないか、とも思う。中退を決意したヒコザが、黙って学校をやめればいいのに、わざわざ僕とドカに別れの手紙を書いてよこしたように。

「気持ちちはわかるよ」

ジン先生は一つうなずいてから、「でもな」と諭す口調で言う。「いまは誰とも会いたくないって、ドカくんが言ってるんだから」

オレらは別ですよ絶対に、と言いかけた僕を目で制して、つづけた。

「一人になりたいときに一人にしてやるのも、友だちの役目だ」

僕たちはなにも言い返せなかった。

三日間の自宅謹慎が明けても、ドカは学校に来なかった。その間に、いいかげんな噂が学校に